看護基礎教育における臨地実習のりこえ感と看護実践能力の関連の検討

隅田 千絵（四天王寺大学 看護学部，sumida-c@shitennoji.ac.jp）

The relationship between the sense of overcoming clinical practicums in basic nursing education and nursing competency

Chie Sumida (Faculty of Nursing, Shitennoji University, Japan)

Abstract

In this study, we investigated the relationship between a newly developed scale—the Sense of Overcoming Practicums Scale (provisional name)—and nursing competency among novice nurses to examine the scale's predictive validity. As a result, the scale was confirmed to have a three-factor structure and be reliable and valid. However, additional refinement will be needed as Factor 1 included a mixture of items from different constructs. The scale was found to have a significant positive correlation with nursing competency among novice nurses. Furthermore, the results of exploratory investigation by educational institution type revealed significant standardized partial regression coefficients (β) for positive evaluation of independence and self/others on competency among novice nurses who were vocational school and junior college graduates, and for independence and positive evaluation of self/others on competency among novice nurses who were four-year college graduates, respectively.

Key words

nursing education, novice nurses, clinical practicums, nursing practice competency, nursing students

1. はじめに

現在の看護基礎教育は、平成20年度のカリキュラム改正において、看護基礎教育内容の充実と実践能力の強化に焦点があてられ（厚生労働省，2007）、カリキュラム改訂後の評価と教育内容のさらなる充実を図るとし（厚生労働省，2009）、看護教育の内容と方法に関する検討会報告書（厚生労働省，2011）では、学生の看護実践能力を明確化するとともに、横断的な学習方法の提案や新たに卒業時到達目標を作成するなど、教育内容の質に重点がおかれてきた。そして、令和4年度のカリキュラム改定においては、看護基礎教育のさらなる充実のために、臨床判断能力などの基礎力の強化のために各領域での臨地実習単位の増加や主体的な教育が推奨されている（厚生労働省，2021）。

その理由として、看護基礎教育で習得する技術と臨床現場で求められるものに乖離があること、医療の高度化、在院日数の短縮や患者の権利の擁護などの観点から、臨地実習 で学生が経験できる範囲や機会が狭くなっていることなどがあげられ、さらに就職後も自信が持てない不安の中で業務を行わざるをえなくなり、リアリティショックを受け早期離職へとつながること（厚生労働省，2007）などがあげられる。このような背景から、臨地実習での学びが、看護基礎教育の中でも重要視されてきた。

しかし、学生にとっての臨地実習は、学内実習とは異なる場所で、自分とは異なる世代の様々な発達段階にある人を対象とし、習得した知識や技術を対象者に合わせて提供するなど、精神的なストレスも大きく（平賀・尾西，2022；長澤・堀，2021；樋之津・林・村井・高島，2007）、学習が停滞するなどの困難な経験を持つことも指摘されている（中元・伊藤・山本・松田・門・横溝，2015）。臨地実習を看護学の学習過程の一つとして捉えるとき、その過程は教員と指導者そして患者や実習グループメンバーなど、学生に関わるすべての人とともに展開されていく。隅田（2020）では、困難な出来事を経験した学生へインタビュー調査を行い、どのように乗り越えたのか、乗り越える状態に至った要因について語りを得た。その結果、教員と指導者、周りの人々との充実した関わりや、成し遂げたというポジティブな体験が、実践教育の場でのよりよい学びにつながるものと考察された。困難を乗り越える要因として、個別インタビューからは、外的支援や主体的行動、内面的な強さなどの3要因が、グループインタビューでは、外的な支援や自己の目標があること、乗り越える自信をもっていること、問題解決行動がとれることなどの4要因が抽出された。これらの要因と文献検討を踏まえて、29項目からなる尺度の試作版を作成した。作成した尺度は、困難な出来事からの立ち直る要因を示している。立ち直った状態を導いた要因を明らかにすることで、臨地実習において学生が必要とする支援を導くことができ、必要とする支援を学生が得ることで、実習への適応を促進し、臨地実習での学びを深めることができる。得点の低い項目は、乗り越えるために教育的支援が必要であることを示しており、教育実践に資することが期待される。また、実習の前・中・後を通して得点の低い項目について、働きかけを行うことで困難さからの立ち直りを促進することができると考えている。

本研究では、作成した尺度の妥当性を検討するために、職業継続意欲や学びに関連する、看護実践能力（中野・岩佐，2019）との関連を検討することとした。看護実践能力は、看護師の能力を表現する概念であり、「看護実践における専門的責任を果たすために必要な個人適性、専門的姿勢・行動、そして専門的知識と技術に基づいたケア能力という一連の属性を効果的に発揮できる能力」のこ

とを指しており、看護技術の習得だけでなく、看護実践に必要な、倫理観や看護管理能力の保持、専門職としての学習態度の形成など多面的な要素を含んだ総合能力である（高瀬・寺岡・宮腰・川田，2011）。大学教育と看護実践能力には関連があることが指摘されていることからも（萩野・鈴木・土居・新井，2014）、大学での充実した学びが看護実践能力の向上に重要であるといえる。とりわけ、臨地実習は1年に及ぶ実践型の学習であり、一つ一つの領域別実習で成し遂げたという達成感情を持つことは、看護への関心を深め、学習意欲へとつながり、卒後も学習姿勢を継続することが予測されることから、臨地実習での学びを促進する要因である、臨地実習のりこえ感尺度と看護実践能力は関連すると推察される。なお、本研究では、学生時代の臨地実習での経験が看護実践能力に影響しているのかを検討するため、臨地実習をすべて修了し、卒業からそれほど期間の経っていない1～3年目の新人看護師を対象とする。

2. 研究目的

本研究の目的は、作成中の尺度である、「実習のりこえ感尺度（仮）」の予測的妥当性を検討するために、看護実践能力との関連を検討することである。

3. 研究方法

3.1 調査対象

インターネット調査会社「楽天インサイトに」登録している新人看護師（卒後1～3年目）200名程度。

3.2 調査期間

2021年11月30日から2021年12月7日にかけて実施した。

3.3 調査手続き

調査はインターネット調査会社へ依頼し、登録している看護師に対して、実務経験、卒後年数と年齢から新人看護師をスクリーニングした。また、調査内容に同意を得られた者だけが調査票へと回答できるように設定した。

3.4 調査内容

(1) 実習のりこえ感尺度

臨地実習での経験を検討するために、インタビューや文献検討により作成した29項目からなる尺度である。本尺度は、臨地実習をすべて経験した新人看護師が、学生時代を想起し、臨地実習中に困難な出来事に遭遇した際に、どのように乗り越えたかについて問うており、「あてはまらない」から「あてはまる」の4件法で回答を求めた。得点が高いほど乗り越えやすい状態であることを意味する。

(2) 新人看護師の実践能力評価尺度

厚生労働省から出されている新人看護職員の臨床実践能力の向上に関する検討会報告書（2004）や、文献検討により作成した30項目からなる尺度で、「あてはまらない」から「あてはまる」の4件法で回答を求めた。得点が高いほど看護実践能力が高いことを意味する。

3.5 分析方法

統計ソフトIBM SPSS Statistics 28を使用し分析した。

3.6 倫理的配慮

調査の実施へあたっては、調査の回答は任意であること、回答の拒否による不利益は被らないこと、結果はすべて統計的に処理されること、回答は無記名でありプライバシーは保護されることなど、調査会社のモニター規約および個人情報保護規定に基づくことをアンケート開始前に画面に掲載し、同意ボタンをクリックしたものだけが回答できるように設定された。なお、本調査にあたり、研究者の所属する大学の研究倫理審査委員会の承認を得て実施した（申請番号：20190004）。

4. 結果

4.1 対象者の属性

対象者200名中、191名（男性7名、女性184名）の有効回答を得た（96％）。平均年齢23.62歳、卒後年数は、1年目が59名、2年目が57名、3年目が75名である。最終学歴は、専門学校が65名、短大が1名、大学が125名である。所属している医療施設では、診療所（無床）が4名、診療所（1～19床）が2名、病院（20床以上）が177名、その他通所リハビリなどが8名であった。

4.2 尺度の検討

4.2.1 実習のりこえ感尺度

実習のりこえ感尺度29項目の平均値、標準偏差を算出し、得点分布を確認した。いくつかで偏りが見られたが、天井効果の見られた1項目を除き、残り28項目についてはいずれも学生時代の臨地実習評価を行う上で必要な項目であると判断し、分析対象とした。

次に、実習のりこえ感尺度28項目に対して因子分析（最尤法，Promax回転）を行った。その結果、因子負荷量の絶対値0.35以上を基準に、3因子24項目を採用した（表1）。第1因子は、「理想とする看護師との出会い」や「教員からの指導」、「実習中出来ることが増えることでやりがいを感じた」など、他者からの支援を受けることや自らの感じ方など前向きな気持ちを表す項目からなったため、「自他への肯定的評価」と命名した。第2因子は、「実習中、声掛けや振る舞いに気を付けた」や「目の前にある課題に積極的に取り組んだ」、「自分が変わって取り組もうと思った」など、自ら主体的に臨地実習を乗り越えようと取り組む項目からなったため、「自主性」と命名した。第3因子は、「家族は私の話を聞いてくれた」や「家族が実習のつらさを共有してくれた」、「実習グループ以外の友人が思いを受け止めてくれた」など、家族友人からの支援を表す項目からなったため、「家族友人からの支援」と命名した。

因子間の相関関係について検討すると、第1因子「自

表 1：実習のりこえ感尺度／因子分析結果

項目	因子負荷量 Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ
Ⅰ　自他への肯定的評価（$\alpha = .847$）			
指導看護師の指導は、私の気持ちを前向きにした	.714	–.088	–.023
理想とする看護師との出会いが、実習へのモチベーションとなった	.713	–.114	.024
指導看護師の指導をきっかけとして学ぶ機会を得ることができた	.648	–.012	.021
指導看護師は、私の話を聞いてくれた	.612	–.212	.071
カンファレンスなどの場を利用し、周りに助けを求めやすい状況を作った	.572	.102	–.106
身体的疲労を軽減するために環境を工夫した	.509	.057	–.013
紙面による振り返りを行うことで、自分の状況を理解することができた	.499	.240	–.098
実習中は、感情をうまくコントロールすることができた	.484	–.100	.140
実習先以外の場所で、自分の思いをわかってもらえたという実感を持てた	.476	–.041	.301
実習中、できることが増えることでやりがいを感じた	.464	.146	.007
教員からの指導は、自分の状況を分析するきっかけとなった	.456	.100	.066
先輩は、私の話を聞き、アドバイスをくれた	.449	–.086	.045
受け持ち患者は私の気持ちを奮い立たせる存在であった	.359	.248	–.147
Ⅱ　自主性（$\alpha = .846$）			
実習中、自分の声かけ・ふるまい方について気を付けるようにしていた	–.228	.793	.111
何をしても何かしら指摘を受けるのであれば、積極的に取り組んだほうがいいという現状を受け入れた	.031	.714	–.063
患者と意思疎通が図れるように、コミュニケーションをとった	–.115	.688	.066
目の前にある課題に必死で取り組んだ	–.191	.644	.123
自分の責任は重たいものだと実感し真剣に取り組んだ	.042	.597	.078
患者のために、普段の自分より積極的に取り込んだ	.157	.581	–.790
他者とのかかわりの中で自分を見つめなおす機会を得た	.258	.477	–.105
周りを変えるのではなく、自分が変わって取り組もうと思った	.359	.432	.067
Ⅲ　家族友人からの支援（$\alpha = .714$）			
家族は、私の話を聞いてくれた	.007	.046	.829
家族が実習のつらさを共有してくれた	.061	.045	.774
実習グループ以外の友人が、私の思いを受け止めてくれた	.074	.124	.359
因子相関	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ
Ⅰ		.557	.186
Ⅱ			.209
Ⅲ			

他への肯定的評価」と第 2 因子「自主性」との間に正の中程度の相関、第 1 因子「自他への肯定的評価」と第 3 因子「家族友人からの支援」との間に低い正の相関、第 2 因子「自主性」と第 3 因子「家族友人からの支援」との間に低い正の相関がみられた。

因子分析において各因子に高い負荷量を示した項目の平均値を算出することにより、自他への肯定的評価得点（平均 2.57、*SD* 0.47）、自主性得点（平均 3.05、*SD* 0.47）、家族友人からの支援得点（平均 3.03、*SD* 0.69）とした。内的整合性を検討するために Cronbach の α 係数を求めたところ、第 1 因子「自他への肯定的評価」では 0.847、第 2 因子「自主性」が 0.846、第 3 因子「家族友人からの支援」が 0.714 と十分な値が得られた。性差や卒後年数、所属、最終学歴での有意な差は見られなかった。

4.2.2 新人看護師の実践能力評価尺度

新人看護師の実践能力評価尺度 30 項目の平均値、標準偏差を算出し、得点分布を確認した。いくつかで偏りが見られたが、いずれも新人職員の看護実践能力評価を行う上で必要な項目であると判断し、分析対象とした。

次に、因子分析（最尤法，Promax 回転）を行った。因子間の相関を確認したところ、高い相関を示していたため、全ての因子は同じ概念を示していると判断し、1 因子「新人職員看護実践能力」と命名した。Cronbach の α 係数は、0.961 であった。

また、性差や卒後年数、所属や最終学歴での有意な差は見られなかった。

4.3 相関関係

尺度の予測的妥当性を検討するために、「実習のりこえ感尺度」と「新人看護師の実践能力評価尺度」の相関係数を算出した（表 2）。その結果、尺度間に有意な正の相関がみられた。

4.4 重回帰分析

実習のりこえ感尺度の下位 3 つの尺度得点について、新人看護師の実践能力に与える影響が卒後年数と最終学歴によって変化がないか、相関を確認したところ、最終学歴において違いが見られたため（表 2）、最終学歴別の影響を検討した（表 3）。なお、調査においては専門学校卒業、短大卒業、大学卒業、大学院卒業の 4 つの回答を用意したが、大学院卒業者はおらず、短大卒業者も 1 名であったため、分析では、専門学校・短大卒業（3 年制）と大学卒業（4 年制）で行った。卒業学校種別での差については、以下のような結果が得られた。

専門学校・短大卒業では、自主性と家族友人からの支援から新人看護師の実践能力に対する標準偏回帰係数（β）が有意であった。一方、自他への肯定的評価から新人看護師の実践能力に対する標準偏回帰係数（β）は有意ではなかった。

大学卒業では、自他への肯定的評価と自主性から看護実践能力に対する標準偏回帰係数（β）が有意である一方、家族友人からの支援から新人看護師の実践能力に対する標準偏回帰係数（β）は有意ではなかった。

5. 考察

本研究は、作成した尺度の妥当性を検討するために、臨地実習のりこえ感尺度と新人看護師の実践能力との関連を検討した。その結果、「実習のりこえ感尺度」は 3 つの因子からなる尺度であり、臨地実習での経験を表す「実習のりこえ感尺度」得点が高いものは、「新人看護師の実践能力尺度」得点が高く、学生時代の臨地実習がその後の看護師としての能力に関連する重要な科目であることが推測される結果となった。以下に作成した尺度の妥当性と関連について述べたい。

5.1 臨地実習のりこえ感尺度の妥当性

本尺度は、「自他への肯定的評価」「自主性」「家族友人からの支援」からなる 3 因子構造を示していることが明らかとなった。

中平（1995）によると、実習中のストレス構造は、「看護職に対する満足度」「教員・グループメンバーからのサポート」「実習適応」「自己能力評価」「看護師のサポート」「実習での困惑体験」「看護関係の不成立」の 7 因子から成ると報告している。また、高橋・柴田・鹿村（2006）は、実習適応には、これらの要因が含まれると述べている。第 1 因子は、看護師や教員からの支援を示す内容や、自己あるいは他者の能力を肯定的に受け止めている内容を示す項目で構成されていることから、先行研究の実習適応へ導く内容と類似しており、臨地実習を乗り越えるために必要な因子として抽出されたと考えられる。しかしながら、第 1 因子において気持ちを表す内容や他者から

表 2：実習のりこえ感尺度と看護実践能力尺度の関連（校種別）

	自他への肯定的評価	自主性	家族友人からの支援	看護実践能力
4 年制大学				
自他への肯定的評価	—	.507 **	.341 **	.524 **
自主性		—	.255 **	.590 **
家族友人からの支援			—	.190 *
看護実践能力				—
専門学校・短期大学				
自他への肯定的評価	—	.540 **	.264 *	.488 **
自主性		—	.414 **	.620 **
家族友人からの支援			—	.493 **
看護実践能力				—

注：** $p < .01$

表 3：最終学歴別／重回帰分析結果

説明変数	専門学校・短大			大学		
	B	*SE B*	*β*	*B*	*SE B*	*β*
自他への肯定的評価	.194	.110	.195	.253	0.083	.263 **
自主性	.353	.106	.393 **	.467	0.087	.452 ***
家族友人からの支援	.193	.068	.287 **	–.009	0.050	–.011
R^2	.478 ***			.396 ***		

注：* $p < .05$, ** $p < 0.01$, *** $p < 0.001$

の支援を示す内容など、概念の異なる項目が混在しているため、今後さらなる尺度の精錬を行うことが課題である。

第 2 因子の「自主性」は、困難さを乗り越えるために自らが積極的に努力する項目となっている。そもそも看護学生は、入学時に既に職業を選択している学生が多く（原・中島・窪田，2018）、臨地実習に積極的に取り組む動機づけがあるといえる。また、看護学実習は、およそ 1 年に及ぶ臨地での体験であり、1 クール 3 ～ 4 週間の臨地実習を繰り返し経験する。高橋・内藤（2019）は、学習効果を高める振り返りを支援することが教員の支援として重要と述べており、そのような支援を受けることもまた繰り返し経験することにより、学生の自主性が維持・向上されるため、臨地実習への自主性が培われると推測され、乗り越える状態を導く因子として構成されたと考えられる。

青年期は、対人関係としては、身近な家族や友人と関係性が成熟していく時期であり（古谷・八木，2016）、困難な状況に遭遇した際に、相談できる身近な存在として支援を求めやすい。また、佐藤・佐藤・菅谷・森（2020）の研究では、看護学生のメタ認知的知識について、家族関係によって有意差があることを明らかにしており、家族からの支援は、困難さからの乗り越えに関連すると推察できるため、第 3 因子「家族友人からの支援」は、臨地実習からののりこえ感を表す概念に含まれるといえる。

5.2 のりこえ感尺度と新人看護師の実践能力との関連

臨地実習での経験を「実習のりこえ感尺度」と卒後新人看護師の実践能力を測定する「新人看護師の実践能力評価尺度」を用いて調査した結果、2 つの尺度間には正の相関があり、実習のりこえ感の高いものは、新人看護師の実践能力が高いことが明らかとなった。さらにその関連を探索的に検討した結果、最終学歴、つまり 3 年制の学校卒業者と 4 年制の学校卒業者で、有意な差が見られた。

まず、自主性について、専門学校・短大卒業と大学卒業の両者がともに有意な差が見られた。この結果から、看護学生は積極的に臨地実習に取り組み、努力していることが推察できる。看護学生は、入学時に既に職業を選択している学生が多く（原他，2018）、将来の目標が明らかであることから、前向きに学習活動に取り組むものと考えられる。そのため、校種に関係なく、新人看護師の実践能力と、実習のりこえ感尺度の下位尺度である自主性に有意な差が見られたと考えられる。

つぎに、専門学校・短大卒業の新人看護師が有意な差があったものとして、友人家族からの支援がある。これは 20 ～ 21 歳で経験する臨地実習と 21 ～ 22 歳で経験する臨地実習では、何らかの相違がある可能性を示すものとして捉えることができる。看護師養成機関としての 4 年制大学では、1 年次と 2 年次の 2 年間をかけて一般教養と看護の基礎知識を学ぶ。一方 3 年制の専門学校と短大では、1 年次にそれらを学び、2 年次の後期から臨地での本格的な臨地実習が始まる。そのため大学生では、高校を卒業して、新たな学問に取り組む時間に比較的ゆとりがあり、専門学校・短期大学生と比べ、新たな人間関係の構築や、新たな学習環境に適応できる猶予が長いことが考えられる。また、青年期後期を 18 ～ 20 歳と 21 ～ 22 歳で分けてアイデンティティの発達傾向を調査した研究において、18 ～ 20 歳では、アイデンティティの混乱が 21 ～ 23 歳に比べて高い傾向にあることが示されており（畑野・杉村・中間・溝上・都築，2020）、3 年制の短大・専門学校と 4 年制の大学で、有意な差があったとする今回の調査結果を支持するものといえる。そもそも 18 ～ 20 歳という年齢は、高校を卒業したばかりの学生であり、新たな環境の変化に適応するために不安定な時期であるが（Sugimura & Shimizu, 2011）、対人関係としては、身近な家族や友人と関係性が成熟していく時期でもある（古谷他，2016）。関係性が成熟するほど家族や友人へ相談しやすく、支援を受けやすい状況にあり、今回の結果につながったと考えることができる。

最後に、大学卒業の新人看護師に有意な差があったものとして、自他への肯定的評価がある。下位尺度から、教員や指導者、先輩や患者等から自分は受け入れられているという感覚を持っていることや、ポジティブな感情を持って取り組んでいることが推察できる。隅田（2020）によると、支援があることを認識することが重要であり、その認識のもとに活用していくことの必要性が述べられている。支援を受けるということは、他者から手をさし伸ばされることをただ待つことではなく、支援を得ていると認識した上で享受するものといえる。看護学実習は，学生・指導者・患者の 3 者の関係を中心に，それぞれにほかの医療従事者，家族，他の学生が複雑に関係しあうことを必然とする授業である（杉森・舟島，2016）といわれているが，学生を取り巻くこのような環境が，学生にとって居心地のよい安心できるものでなくてはならない。なお、4 年制の大学生が有意な差があった要因としては、3 年制の専門学校・短大生と比べた先行研究が見られないため、特定することは難しい。しかしながら、4 年制の大学では、1 年多く教員や友人、あるいはその他の人々と人間関係を構築する機会があり、アイデンティティの発達的な側面から見ても混乱がやや低いことから、比較的こころが安定した状態であることが推察でき、3 年制の専門学校・短大と比べると自他への肯定的な評価が高くなる可能性が考えられる。

6. おわりに

本研究では、作成した臨地実習での立ち直った状態を導いた要因を測定する尺度「実習のりこえ感尺度」の妥当性を見るために、看護実践能力との関連を検討した。その結果、作成した尺度の信頼性・妥当性が確認され、看護実践能力と関連があることが明らかとなった。しかしながらのりこえ感尺度の第 1 因子において、概念の異なる項目が混在しているため、さらなる尺度の精錬が課題となった。また今後、困難に感じる内容や程度、パーソナリティについて考慮し、困難さからの乗り越え方に

どのように影響するのかを検討することも課題である。

謝辞

本研究は、四條畷学園大学健康科学研究所研究支援資金の補助を受け実施した。

引用文献

古谷健・八木善彦（2016）．大学生における親密な人間関係と人格発達．立正大学心理学研究所紀要，14，27-38.

萩野待子・鈴木みゆき・土居洋子・新井信之（2014）．新卒看護師の大学時代の学習状況と看護実践能力の関連．兵庫医療大学紀要，2（1），47-56.

原やよい・中島富有子・窪田恵子（2018）．看護学生の学習意欲に影響を及ぼす要因．バイオメディカル・ファジィ・システム学会誌，20（2），29-35.

畑野快・杉村和美・中間玲子・溝上慎一・都築学（2020）．青年期・成人期初期におけるアイデンティティの発達傾向と人生満足感の関連―大規模横断調査に基づく検討―．発達心理学研究，31（1），26-36.

平賀元美・尾西幸恵（2022）．A 大学の基礎看護学実習における学生の実習前後のストレス対処力とソーシャルサポート．名古屋学芸大学看護学部紀要，1，21-29.

樋之津純子・林啓子・井村文江・高島尚美（2007）．臨地実習における看護学生の気分変化と自律神経反応との関連．札幌市立大学研究論文集，1（1），31-34.

厚生労働省（2004）．新人看護職員の臨床実践能力の向上に関する検討会．https://www.mhlw.go.jp/shingi/2004/03/s0310-6.html.（閲覧日：2022 年 7 月 21 日）

厚生労働省（2007）. 看護基礎教育の充実に関する検討会報告書．http://www.mhlw.go.jp/shingi/2007/04/dl/s0420-13.pdf.（閲覧日：2022 年 7 月 19 日）

厚生労働省（2009）．看護の質の向上と確保に関する検討会中間とりまとめ．http://www.mhlw.go.jp/shingi/2009/03/dl/s0317-6a.pdf.（閲覧日：2022 年 7 月 19 日）

厚生労働省（2011）．看護教育の内容と方法に関する検討会報告書．http://www.mhlw.go.jp/stf/houdou/2r985200000013l0q-att/2r985200000013l4m.pdf.（閲覧日：2022 年 7 月 19 日）

厚生労働省（2021）．看護基礎教育検討会報告書．https://www.mhlw.go.jp/stf/newpage_07　297.html.（閲覧日：2022 年 10 月 26 日）

中平洋子（1995）．臨床看護実習における学生のストレスと実習適応に関する一考察．神戸市立看護短期大学紀要，8，137-144.

中元朋世・伊藤朗子・山本純子・松田藤子・門千歳・横溝志乃（2015）．臨地実習における学生の困難感の特徴と実習状況による困難感の比較―基礎看護学実習と成人看護学実習の比較を通して―．千里金蘭大学紀要，12，123-134.

中野沙織・岩佐幸恵（2019）．中堅看護師の職業継続意思に関する文献検討―「離職」と「職業継続」の理由に焦点をあてて―．*The Journal of Nursing Investigation*，16（1-2），10-22.

長澤清隆・堀良子（2021）．看護学臨地実習で学習が停滞している学生が指導する教員に臨むこと．駒澤大学研究紀要，4，71-84.

佐藤みつ子・佐藤佑香・菅谷智一・森千鶴（2020）．大学生のメタ認知の特徴―看護学生・理学療法士・整復トレーナー学生の比較―．了徳寺大学研究紀要，15，221-224.

Sugimura, K. & Shimizu, N. (2011). Idenntity development in the learning sphere among Japanese first-year university students. *Child & Youth Care Forum*, 40, 25-41.

杉森みど里・舟島なをみ（2016）. 看護教育学 第 6 版．医学書院.

隅田千絵（2016）．看護学実習における学生のレジリエンスについての概念分析．日本医学看護学教育学会誌，25（1），15-21.

隅田千絵（2020）．臨地実習における看護学生のレジリエンス―フォーカスグループインタビューによる分析―．四條畷学園大学看護ジャーナル，3，7-16.

高橋平徳・内藤知佐子（2019）．看護教育実践シリーズ 5 体験学習の展開．医学書院.

高橋ゆかり・柴田和恵・鹿村眞理子（2006）．看護学生の実習適応に関する研究（第 1 報）―尺度作成の試みと信頼性・妥当性の検討―．群馬パース大学紀要，2，37-46.

高瀬美由紀・寺岡幸子・宮腰由紀子・川田綾子（2011）．看護実践能力に関する概念分析―国外文献のレビューを通して―．日本看護研究学会雑誌，34（4），103-109.

（受稿：2022 年 8 月 1 日　受理：2023 年 1 月 25 日）